



写真：パキスタンの子どもたち

Contents

2020 年度 CODE 基本方針	1
特集：新型コロナウイルス禍の世界 —各地の仲間たちより—	2
2019 年度事業報告、 2020 年度事業計画	6
CODE 未来基金 NEWS	10
プロジェクトレポート	12
スタッフ活動記録・今後の予定	14
会員・寄付者ご芳名	15
イベント案内	15
活動へのご協力をお願い	16

2020 年度 CODE 基本方針「支え合い・学び合いの実践」

2019 年度は、国内外で気候変動による台風や豪雨災害が多く発生し、自然災害で家を失った人は、紛争による難民を超え、約 700 万人に上るといわれる。また、2019 年末より中国湖北省武漢市が起源といわれる新型コロナウイルス感染症は、世界 188 の国と地域で感染が拡大し、660 万人以上が感染し、38 万人以上が帰らぬ人となっている。(6/5 Johns Hopkins 大学集計)

このパンデミックは、人の行動の自由とつながりに大きな影響を与え、経済や暮らし、コミュニティに大きな変容を強いると同時に、平素から最も厳しい状況にある人々をより厳しい状況へと追いやっている。

CODE は、中国の NGO と立ち上げた国際アライアンスで 14 の国・地域と新型コロナウイルス感染症への取り組み、経験を共有し、「支え合い・学び合い」の実践を行っている。CODE と連携する海外の国々に目を向けると、NGO やボランティアたちが、公助の隙間を埋めるように最も厳しい状況にある人々を支えるために多彩な活動を展開している。それは、STAY HOME が「何もできない、何もしない」ことではない事を教えてくれる。STAY HOME が感染防止のために必要であるが、感染のリスクを冒してでも働かざるを得ない人々、家が安心できる場ではない人々、STAY HOME できる家のない人々がいることを忘れてはならない。

CODE は、これまで被災地の現場で出会った一人ひとりの声に耳を傾け、支援の中で「寄り添い」や「つながり」という言葉を紡いできた。だが、感染症を踏まえた災害対応を考えると、感染を防止するための「物理的距離」は、寄り添うことを困難にし、人のつながりを希薄なものにしていく。物理的な距離はあっても心でつながる本当の意味での「社会的距離」を大事にすると同時に、NGO としてどのような状況であっても最後の一人に寄り添うことにこだわり、ポストコロナにむけて新たな方法を見出していきたい。

2020 年、私たちは、歴史的な感染症によるパンデミック、そして気候変動という二つ世界共通の課題を突きつけられることとなった。CODE は、阪神・淡路大震災から 25 年を振り返り、積み残したいくつかの課題を踏まえつつ、新型コロナウイルス感染症が問いかける課題に真摯に向き合っていくと同時に、この 25 年間紡いできた「支え合い・学び合い」の実践をより深めていきたい。

世界が分断されていく中、私たち CODE は世界の市民としっかりと連帯し、新たな社会の変化を見極めつつ、希望ある未来を創っていきたい。

(CODE 事務局長 吉椿雅道)

新型コロナウイルス禍の世界 —各地の仲間たちより—

2020年、世界中に広がった新型コロナウイルスの影響は、私たちの生活のあらゆる面に及んでいます。このパンデミックは世界中のすべての人々が当事者である一方、本当に困難な状況にある人を覆い隠してしまっています。日本ではあまり報道されない、世界各地のコロナ禍での状況や取り組みをご紹介します。※感染者数、死者数は9月23日時点 ジョンス・ホプキンス大学集計

中国

新型コロナウイルス感染症が、最初に爆発的に流行した中国湖北省武漢市。1月23日から地元政府は、市につながるすべての道を封鎖し、市内の公共交通機関もすべて運行停止、外出は2日に1回、代表者1名のみ、違反したものは罰金という厳しい規制を敷きました。買い物や病院搬送、検診、ホームレス、障がい者への物資提供など公助から取りこぼされている人を支えたのは、武漢市民のボランティアとNGO、そしてそれらを支える人々でした。

武漢では、76日間の厳しいロックダウンが4月8日に解除され、市民約1,000万人にPCR検査が実施されました。また、携帯の「健康コード」アプリに健康状態を入力し、駅、デパートなど公共施設の至るところでコードをかざすことで、感染経路を追跡するシステムを導入しています。感染を抑え切ったかに見える中国ですが、ロックダウンや家族が急逝したことによるPTSD、回復者への差別と偏見も起きています。

そして5月から約2か月以上降り続けている豪雨によって長江流域では洪水が頻発し、27の省市で被災者が約5,400万人に上っています。8月中旬には四川で避難者10万人が被災する水害が起きています。武漢も洪水の被害を受けており、コロナ感染防止と災害支援という難しい対応が求められています。(吉椿)



ネパール

ネパールでは、1月に中国・武漢より帰国した男性の感染が初めて確認され、その後インドとの国境での出稼ぎ労働者の移動で感染が拡大したと言われています。その後、政府はネパール全土を封鎖（ロックダウン）し、経済に大きな影響を及ぼしました。ネパールでは3月末からロックダウンを再三延長してきました。CODEの仲間であるムクンダさんは「長期のロックダウンで収入がなくなり、体を売る女性も出てきている」と語っていました。

7月末、4か月ぶりにロックダウンが解除されましたが、人の移動に伴って首都カトマンズなどでも感染者が増え始め、8月中旬より複数の都市でロックダウンが再開されました。

ネパール地震（2015）後に会った在ネパール数十年の日本人女性が、「ネパールでは、マオイスト運動など厳しい状況でも餓死者など出ないの面白いところ」と言っていたように、未だ先の見えない状態が続いていますが、ネパール人は共に支え合いながらたくましく生きています。(吉椿)



ムクンダさん



インド

インドの感染者数は、550万人を超えて世界で2番目に多く、連日5万人以上の新規感染者が確認されています。死者は8万人を超えています。最近では、ニューデリーやムンバイのような大都市から、ウッタルプラデシュ州やビハール州のような経済的に貧しい地域に感染が広がってきています。

インドでは、大量の出稼ぎ労働者の移動が感染を拡大させたと言われ、2か月間のロックダウンによる経済への影響は貧困層をより厳しい状況に追いやり、様々な規制を解除せざるを得ない状況が再び感染を広げています。

そのような中、水害も起きており、南部ケララ州などで死者・行方不明者130人以上、避難者約100万人の被害が出ています。国際アライアンスIACCRのメンバーでもあるNGOのアブデシュさんによれば、「住民自身がボランティアで救助活動にあたっているが、貧しい人も多いので生計のためにフルタイムではできない」と語っています。(吉椿)



アブデシュさん



アフガニスタン

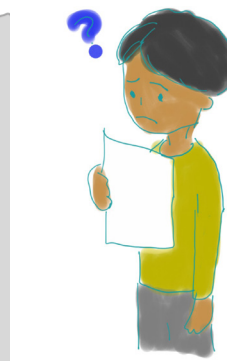
アフガニスタンでは、3万9,000人以上が新型コロナウイルスに感染し、1,400人以上が亡くなりました。CODEのカウンターパートのファルディンさんによると、新型コロナウイルスの影響により、貧困率は10%以上増加し、70%に迫ろうとしています。ロックダウンや外出禁止は、日毎の収入で生活していた貧困層にとって深刻な問題を引き起こしています。

アフガニスタンでは、90%以上の国民は文字を読むことができず、識字率の低さによる新型コロナウイルスに関する知識の欠如が課題となっています。ファルディンさんはマザーリシャリフ州の市民の意識向上を目的として、新型コロナウイルスに関する情報を市民に紹介し、貧しい人々に医療や薬品を提供する活動を行っています。

ファルディンさんは「コロナに対して、アフガニスタンには十分な医療施設がなく、また政府はこの病気に苦しむ市民を診断、治療するための真剣な措置を講じていないため、アフガニスタンでは人道問題ある大災害が引き起こされている」と述べています。(上野)



ファルディンさん



バングラデシュ

アジアの最貧国と呼ばれるバングラデシュでは、感染者数が約35万人で、5月以降爆発的に増加しています。また、南東部にある世界最大規模のロヒンギャ民族の難民キャンプでも感染が広がりました。

CODEのカウンターパートである現地NGO「BDPC」(バングラデシュ防災センター)のサイドゥールさんは、都市スラムなどに住む日雇い労働者がロックダウンによって仕事を失っていることや、感染対策のすべをほとんど理解していない市民が大勢いるという問題を語っています。

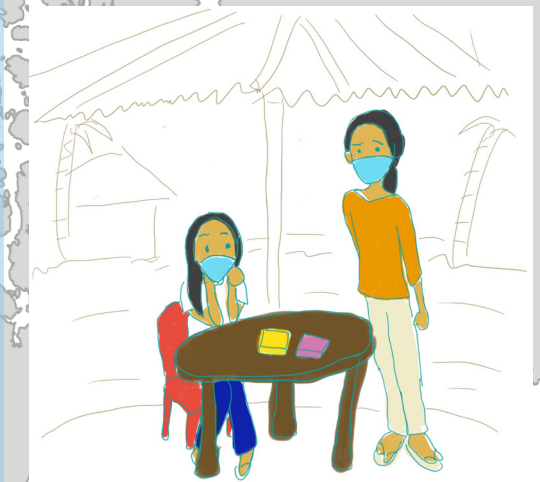
さらに、バングラデシュでは7月の豪雨によって国土の3分の1が浸水する深刻な被害が出ており、約470万人が被災しています。例年6月から9月まで雨期ですが、過去10年で最大級の激しい豪雨に見舞われています。サイドゥールさんは、「私の住んでいる首都ダッカは大丈夫だが、北部のジャマプールとクリグラムという地域の被害が甚大だ。低地に住む人々は洪水に慣れていて、自力で、あるいは地域やボランティア、政府の支援を得て何とかやっているが、これ以上状況が悪化すると対応はかなり難しい」と、激甚化する水害への対応の困難さを語っていました。(立部)

フィリピン

フィリピンでは、感染者が約29万人と東南アジア最多になっています。3月中旬より首都マニラでのロックダウンが始まり、地域の感染状況に応じて4段階の「コミュニティ防疫措置」がとられ、外出や経済活動の制限がなされています。

台風ヨランダ(2013年)の被災以降CODEが支援しているバンタヤン島は、主要産業である観光が大打撃を受けています。カウンターパートのジョジョさんがバンタヤン島に住む女性に聞いたところ、観光業は7月に再開したものの、訪問客は島内で14日間隔離される必要があり、現在のところ観光客は皆無とのことでした。

観光業の影響は、CODEが支援している漁村の人々にも及んでいます。漁業は継続できているものの、人が来ないために供給先のレストランやリゾート、市場が影響を受けており、魚の価格も下落しています。女性たちの石鹸作りプロジェクトも、集会在り制限されていることや、主な販売ターゲットがゲストハウスの宿泊客であることから、休止状態となっています。住民アソシエーションのメンバーたちは、この状況を何とか打開するためのアクションを模索しています。(立部)

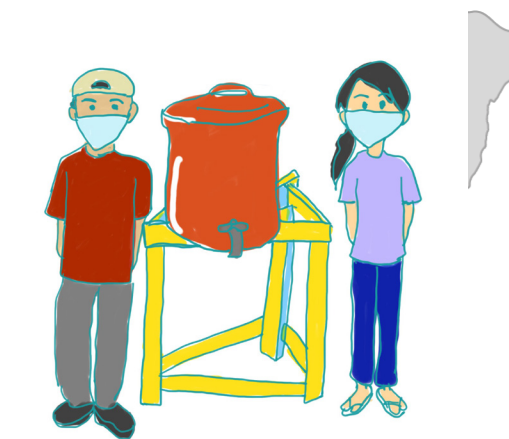


インドネシア

インドネシアでは、感染者数がフィリピンに次いで東南アジア2番目ですが、当初は政府が「インドネシアに感染者はいない」とし、対応の遅れが指摘されていました。ロックダウンは6月から段階的に解除されたものの、再び感染者が急増しており、医療態勢の逼迫が懸念されています。

CODEのカウンターパート、エコ・プラウトさんが教鞭をとるデュタワチャナ・キリスト教大学では、学生がコミュニティと協働したプロジェクトに取り組んでいます。手作りのマスクを配布したり、地域の中にかつてあった手洗い用の水壺の文化に着想を得て、感染対策のためにデザインを凝らした現代版手洗い桶を製作して、各コミュニティに提供したりしました。

また、ある支援グループは、ロックダウンで出荷に困っている地方の農家や漁師と、食べ物に困っている都市貧困層をつなぐ活動をしています。コミュニティにパブリックキッチンを設置し、地方から購入した農水産品で、コミュニティの人と共に食事をつくり、ストリートチルドレンや収入のない女性・高齢者などに提供しました。(立部)



イラスト：岸本くるみ

海外災害地への援助活動事業

アフガニスタン

2019 年度報告

2003 年より始まった「ぶどう畑再生プロジェクト」は、17 年目を迎えました。タリバンによって焼き払われたミールパチャコット地域のぶどう畑を再生するために、現地の人たちが協同組合（コーポラティブシューラー）を設立しました。組合を通じてぶどう農家に再建資金を融資し、返済された資金で新たな農家を支えるというマイクロファイナンス（小規模融資）で実施しています。288 世帯から始まり、現在は 550 世帯が融資を受け、暮らしを営んでいます。2013 年度から現地農家の作った有機レーズンの輸入販売は 520 kg に上り、2019 年度は、新型コロナウイルスの影響で現地スタッフが農家に会えないことから 40 kg の輸入販売に留まっています。

2020 年度計画

2020 年度は、新型コロナウイルスの状況を見つつ、引き続きこのミールパチャコット産の有機レーズンの輸入・販売を行っていきます。この支援プロジェクトを通じて同地区を中心にぶどうの無農薬・有機栽培を浸透させていくと同時に、日本にアフガニスタンの現状を伝える機会をつくっていきます。



ぶどう畑とヒンドウークシュ山脈

中国・四川省

2019 年度報告

2008 年の四川大地震以降支援してきた光明村の老年活動センターの運営状況を見守りつつ、連携している NGO 備災センター（新安世紀教育安全科技研究院）や大阪大学渥美教授と共に「中日安全技術研修」を開催し、中国の NGO 関係者 22 名に防災・復興の研修を行いました。

また、台湾集集地震（1999 年）から 20 周年にあたり、台北の国立政治大学で国際シンポジウムを開催し、日本の NGO の現状を報告しました。四川、台湾、KOBE の 3 者で学び合う貴重な機会を持つことができました。

2020 年 1 月には、カウンターパートである先述の NGO 代表の張国遠さんを神戸市で開催された「世界災害語り継ぎフォーラム」に招聘し、CODE 寺子屋でも中国の NGO の現状について共に議論を深めることができました。

2020 年度計画

現在、新型コロナウイルス感染症の影響で現地に行くことが難しい状況ですが、光明村のキーパーソンを通じて現地の状況に対応していきます。また、防災・減災・復興の研修や感染症と災害支援についての学び合い（国際アライアンス）などの機会も現地の NGO を通じて積極的につくっていきます。



中日安全技術研修

インドネシア

(ロンボク島地震、スラウェシ島地震・津波、スンダ海峽火山津波)

2019 年度報告と 2020 年度計画

2019 年度は、スラウェシ島の地震による液状化で故郷を追われた子どもたちのコミュニティスペースを現地の伝統建築で再建する事業が始まりました。2020 年 1 月に来日したカウンターパートのエコ・プラウトさんと、ロンボク島の木造建築のワークショップやスンダ海峽での専門家の交流の場の提供について協議を行い、実施計画を立てましたが、現在、新型コロナウイルスの影響で各事業が中断状態にあります。インドネシアでも新型コロナウイルスの感染者が 25 万人以上、死者が約 9,800 人と増加しています。国内移動の規制もあり、現在、事業実施が難しい状況にありますが、新型コロナウイルスの状況を見ながら現地と協議していきます。



ロンボク島の伝統的な木造家屋



スラウェシ島の伝統建築/バンタヤ (Bantaya)

新型コロナウイルス感染症

2019 年度報告と 2020 年度計画

世界 188 の国と地域で感染が拡大している新型コロナウイルス感染症ですが、CODE は 2 月よりいち早く中国・武漢支援を立ち上げ、四川の NGO の行うオンライン・ボランティア支援をバックアップしてきました。その後、国際アライアンス「IACCR」を立ち上げ、これまでに 10 回以上の国際会議を開催し、14 の国と地域のメンバーでコロナ禍での取り組みや経験などを共有しています。2020 年度も引き続き、国際アライアンスやカウンターパートを通じて、コロナ禍の中で豪雨や洪水の発生している地域を支援していきます。



IACCR での国際オンラインミーティング

2020 年度総会を開催しました

6 月 13 日（土）に、2020 年度総会を開催しました。今年度は、新型コロナウイルスの影響により初のオンライン開催となりました。正会員 17 名（うち委任状 8 名）、オブザーバー 1 名にご参加いただき、議案である 2019 年度事業報告・決算、2020 年度事業計画・予算・基本方針について審議され、承認されました。事業報告と計画の概要、基本方針に関しては、本誌に掲載のとおりです。今後ともみなさまのご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

NGO ことはじめ

2019 年度も 6 月、7 月に榛木、村井 CODE 理事 2 名を講師に、「概要編」(参加者 10 名)、「実践編」(参加者 11 名)を開催し、NGO、CODE の理念などを学ぶ機会を提供しました。2020 年度も CODE 理事 2 名に、コロナ禍における NGO について講義していただきます。



2019 年度 NGO ことはじめの様子

新企画「〇〇×国際協力」

2014 年から毎月開催してきた食と国際協力(全 59 回開催)をリニューアルして「〇〇×国際協力」を 2020 年度から開催します。〇〇(テーマ)は、それぞれの語り手に入れてもらいます。

第 1 回目は「映画×国際協力」で、映画を通じて台湾の文化、民族、アイデンティティについて、宮本 CODE 副代表理事に語っていただきました(2020 年 8 月 20 日開催)。



「映画×国際協力」より、台湾映画セデック・バレ

2019 年も例年通り教育機関では、神戸学院大学、神戸女子大学の連続講義と、神戸大学、兵庫県立大学、龍谷大学、関西国際大学、舞子高校の講義などを受託しました。北陸学院大学が採択された JICA 草の根技術協力事業を活用したフィリピンの女性の生活向上支援や小学生向けの防災カード作成も 2019 年度で終了しました。その他、コープこうべとは平和のつどいやふれあいの祭りなどでのレーズン販売、関西 NGO 協議会とは理事参画、Kansai-SDGs 市民アジェンダ、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth、近畿ろうきんとは未来基金の震災 25 年企画、社会貢献預金「笑顔プラス」、パナソニックエナジー労働組合洲本支部とはフィリピン台風被災地での女性支援で協働しました。

海外では、フィリピンの NGO ネットワーク「ABAG Central Visayas」や中国の NGO 備災センター(新安世紀教育安全科技研究院)、インドネシアのエコ・ブラウトさん(デュタ・ワチャナキリスト教大学)などと支援プロジェクトを通じて関係を深めてきました。

2020 年度は、支援プロジェクトや世界で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の情報共有を通じて関係を深めていきます。

2019 年度は、震災 25 年ということで、CODE 寺子屋鼎談「阪神・淡路大震災から 25 年 四半世紀の歩みと”いま” —NGO・市民社会・災害支援のこれから—」を開催し、約 60 名の方にご参加いただきました。NGO・市民社会・災害支援のそれぞれの視点から、CODE の理事経験者 3 名(芹田健太郎、室崎益輝、松本誠)に議論していただきました。25 年間積み重ねてきた知見を講演録として冊子にして、みなさまに実費で頒布させていただきます。

また、2019 年度は、CODE 寺子屋特別編も 2 回開催し、中国とインドネシアから CODE のカウンターパートをお招きし、NGO と政府との関係や、自然との共生について学び合う機会を得ることができました。

その他、「災害から一人ひとりを守る」(神戸大学出版社)に中国・四川省やネパール支援の経験を執筆いたしました。

CODE 未来基金

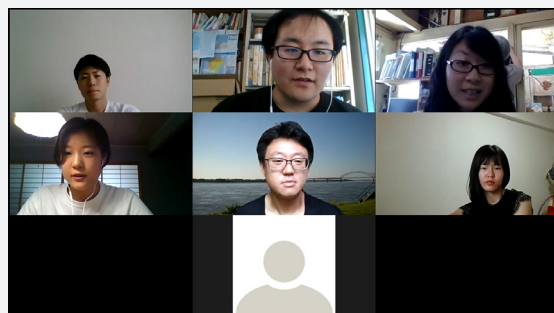
2019 年度報告と 2020 年度計画

次世代の NGO を担う若者を支える未来基金では、これまで 12 名の若者に、フィリピン、ネパール、中国の被災地を訪れて現場で学ぶ機会を提供してきました。2019 年度は、震災 25 年企画「若者の生き方を語る」と題したイベントを開催し、未来基金を活用して海外の被災地を訪ねた若者たちに、その後の生き方や活動、将来への想いを語っていただき、約 200 名の方にご参加いただきました。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症に関連して「世界のステイホームから」という企画を立ち上げ、中国・四川省の大学生とオンライン交流を通じてコロナ禍で起きていたことを共有する機会を持ちました。コロナで厳しい状況に陥った人々を地域で支える若者の活動の一步になればと考えています。



震災 25 年企画「若者の生き方を語る」



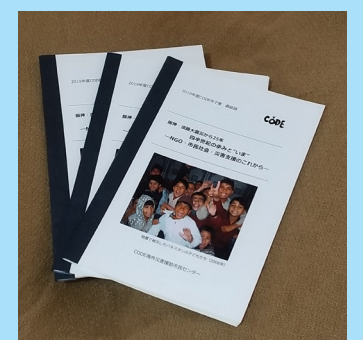
新型コロナウイルス禍での取り組み
「世界のステイホームから」

■ 読み物のご案内 ①

2019 年度 CODE 寺子屋鼎談 講演録

上記の鼎談にて、阪神・淡路大震災からの 25 年の歩みとこれからのについて 3 名が語り合った講演録を、冊子にまとめております。ぜひご一読ください。お求めの方には実費で頒布いたしますので、CODE 事務局までご連絡ください。

「阪神・淡路大震災から 25 年 四半世紀の歩みと”いま”
—NGO・市民社会・災害支援のこれから—」
登壇者： 芹田健太郎 (CODE 前代表理事)
室崎益輝 (CODE 代表理事)
松本誠 (CODE 前理事)



■ 読み物のご案内 ②

『開発援助と緊急援助 (芹田健太郎著作集第 6 巻)』

CODE 前代表理事の芹田健太郎による著作。法学者の立場から、NGO による災害復興支援の意義や、CODE 立ち上げの理念などについても述べられています。ぜひご一読ください。

(出版社より) 国際連帯による協力の国際法を追求。NGO と ODA による国際協力や災害からの復興支援をとおして、「最後の一人」の意味に迫る。
出版社：信山社、発売日：2020 年 5 月 29 日、定価：6,500 円 + 税



CODE 未来基金 NEWS

CODE 未来基金

×

新型コロナウイルス感染症

「世界のステイホームから」とは

新型コロナウイルスの危機が世界中に広がった今年、各国では「ステイホーム」として外出の制限、禁止が行われました。そのような世界中の人にとっての共通した危機を前にして、CODE 未来基金は各国の学生どうしがオンラインで交流し、互いの暮らしを知るという取り組みをスタートしました。CODE に参加する学生のすそ野を広げるとともに、身近な話題についてのコミュニケーションから、さまざまな理由で見えにくくなっている新型コロナウイルスをめぐるニーズの可視化を試みます。8月時点で第4回まで開催されました。その様子をご紹介します。



Stay Home
on the Earth

第1回・第2回—中国・四川大学との交流—

「世界のステイホームから」第1回、第2回は、主に中国の学生からの現地報告となりました。中国の四川大学の大学院生から、それぞれの故郷のコロナウイルス対策やボランティア、政府、企業の動きが伝えられ、日本の学生にとっては、今まで見えてこなかった感染拡大直後の中国国内の動きを知ることになりました。

胡佳さん（四川大学）

四川省内江市の取り組みを紹介

- ・主に3つのグループが活動。
- ・共産党員グループは行政職員を中心に交通部門、野菜供給部門、医療部門に従事。
- ・退役軍人グループは消毒、検温、車両検査、市外から入ってくる人の登録などを担当。
- ・ボランティアグループは車両検査や警備の補助など主に行政のサポート。

世界中に拡大している新型コロナウイルス感染症。CODE 未来基金では、問題に向き合う若者にスポットを当て、長期的な目での支援をスタートしました。今まさに直面している新たなパンデミック、感染症下でも起きる自然災害と向き合う中で、次の世代にも支援の動きが生まれていくことをめざし、CODE 未来基金がサポートする若者を中心とした企画を立ち上げました。今回は、若者が世界の学生とつながり、ローカルの支援にも活かしていく「世界のステイホームから」をご紹介します。

(報告：上野)

苟小芸さん（四川大学）

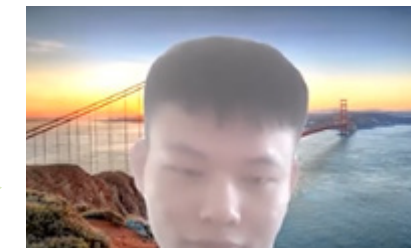
四川省万源市の感染症対策を時系列で紹介

- ・外出が難しい時期には WeChat アプリでオンラインチャットグループを作り、各家庭が必要な物資を共有し、無料で届けられるようにした。
- ・感染者が出たマンションの出入り管理を QR コードを使って行った。
- ・教育について、オンラインでのやり取りを強化した。
- ・患者情報を公開して風評被害を防止した。
- ・コミュニティ単位での独自の対策が必要。

刘建民さん（四川大学）

安徽省安慶市や湖北省武漢市の様子を紹介

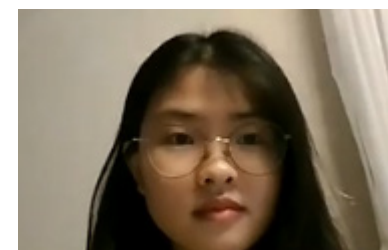
- ・当初は武漢から安慶市に戻ってきた友人もおり、感染が拡大。ロックダウンに伴い感染は急速に落ち着いた。
- ・スマホのコードによる許可証が発行され、それがなければ公共交通機関が使えない。
- ・大学のある四川省へは武漢を経由して戻ったが、ロックダウン解除から2か月経った今も寂しい状況。
- ・6月3日に四川大学に戻って来て付属病院で検査を受け、陰性、隔離されなくてもいいと許可を出され、宿舎に戻って来た。



王翌實さん（四川大学）

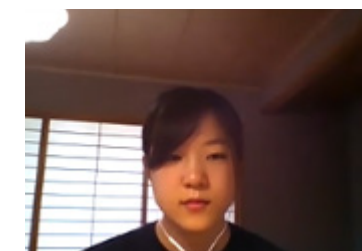
新疆ウイグル自治区の取り組みを紹介

- ・コミュニティワーカーやボランティアが各家庭の物資の買い出しを行うこともあった。
- ・伝統的な屋台文化がある。早々に営業再開したが、それによる感染リスクも心配される。一方で、職を失った人には屋台での出店を推奨しており、経済対策、雇用には効果的。
- ・大学の授業がオンラインになったが、ネット環境や自宅周辺の騒音で集中できない、長時間画面に向かって疲れるなど、弊害もある。



第3回・第4回—自分たちの足元を見つめ直す—

第1回と第2回で中国の学生の報告を聞いた中で、日本国内では学生や地域のボランティアが、コロナウイルスによって生活に影響を受けている人たちに対して支援するような動きがまだまだ足りていないと感じた日本の学生は、地域ボランティアという視点から日本国内の新型コロナウイルスの支援を模索することとなりました。



柳瀬彩花さん（追手門学院大学）

自分の住む地域で困っている人を支える取り組み

- ・社会福祉協議会（社協）には、高齢者向けの Zoom や Facebook の設定の要望、障害者を児童館へ送迎する要望がすでに来ていた。
- ・地域の NPO や社協は掲示板や投書で困りごとを集めているが、そこうまくつながれず、支援からこぼれている人がいるはず。
- ・買い物支援や Zoom サポートなどのボランティアを通じてもっとニーズを集めてみよう。支援団体と困っている人の橋渡しになりたい。

今後の「世界のステイホームから」

これまでの「世界のステイホームから」を通じて、参加した若者の中では、「感染症に対する支援がどういものかわからない」という考えから、「地域の支援から見直していこう」という考えに変わりつつあります。参加した学生の一人、柳瀬さんの活動では、実際に買い物サポートや IT の支援を通じてニーズ調査をするという動きも生まれています。また秋以降、世界の学生のやり取りを共有

する場を増やしていきながら、実際の支援活動の立ち上げや、新型コロナウイルスで影響を受けている人を支援している団体からお話を聞く場をつくるなどしていきます。一つひとつは小さな動きですが、CODE 未来基金はこの新型コロナウイルス感染症という世界共通の課題を通して、次の災害、感染症にも立ち向かうことができる人材を育てていきます。

新型コロナウイルス感染症支援

(報告：吉椿)

世界の感染状況と国際アライアンス「IACCR」

新型コロナウイルス感染症は、わずか数か月で世界188の国と地域に拡大し、感染者は約3,100万人、死者は97万人以上(9月23日 ジョーンズ・ホプキンス大学集計)に上っています。ヨーロッパや日本でも第2波の感染が拡大し始め、収束の兆しすら見えていません。

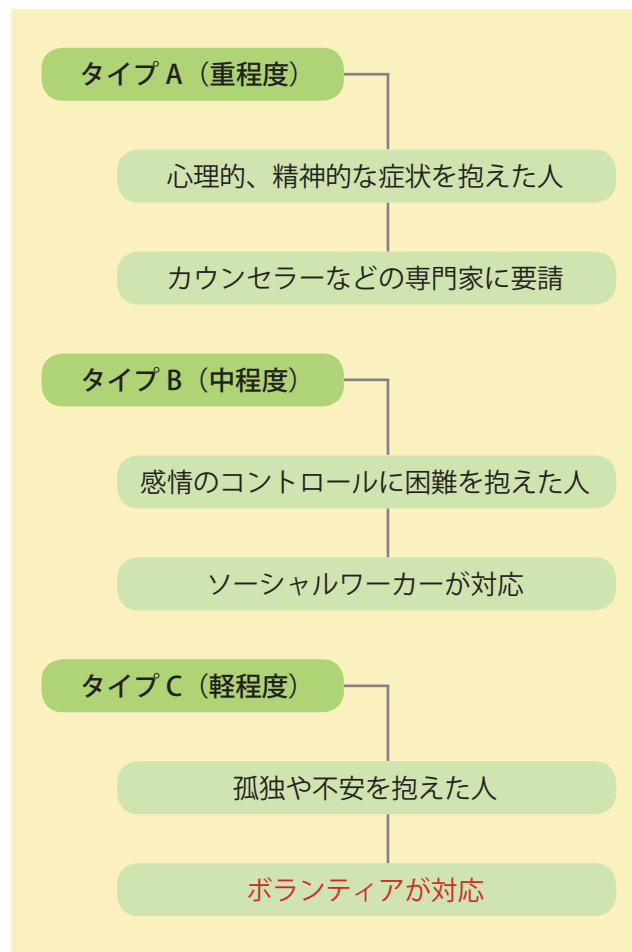
3月に中国のNGOと共に設立したIACCRは、これまでに10回以上の国際会議をオンラインで開催し、現在、参加メンバーは14の国と地域の17の団体と個人になっています。これまで世界各地のメンバーと共有してきたテーマは、各地の取り組みや経験、社会心理、共生社会、ポストコロナの経済回復、グローバルアクション、ユースフォーラムなど多岐にわたっています。

ボランティアにもできることがある

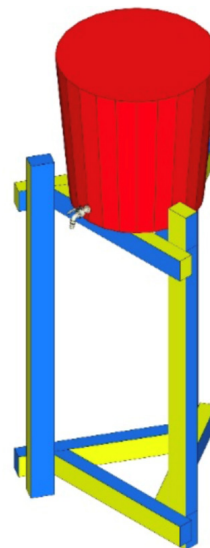
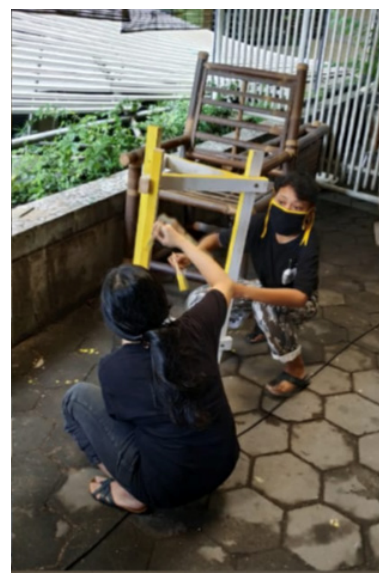
その中でも非常に興味深かったのは、武漢のNGOが独居の高齢者に実施した3段階の心のケアです。重篤者へは、専門のカウンセラーが対応し、中等の方にはソーシャルワーカーが対応し、「寂しい。話し相手がほしい」などの軽症の方にはボランティアが対応していたということです。これは、専門家ではないボランティアにもできることがあるという可能性を提示しています。

地域文化に根差した支援

また、インドネシアからの報告では、学生たちが、地元の地域にあった手洗い文化を復活させたという事例が紹介されました。その地域には昔、パダサン(Padasan)という衛生文化があり、各家の前や庭には、手洗い桶があったそうですが、時代と共に住居も変化し、手洗い桶もなくなっていました。そしてこのコロナで手洗いの重要性から過去の文化を学んだ学生たちが、手洗い桶を新たなスタイルで復活させました。これは、身近な暮らしの知恵がコロナ感染予防や防災につながるということを教えてくれます。このようにIACCRは、現地ならではの事例が報告される貴重な場になっています。



武漢での独居高齢者支援
3段階に分けて対応した



かつて地域にあったパダサン(左)と、大学生が現代の感染予防のために復刻した手洗い桶(上)

議論からアクションへ

先日開催したIACCRのメンバーミーティングでは、これまでの国際会議の開催の意義と継続についての議論と同時に、感染が未だ拡大している中、具体的なアクションも必要であることが確認されました。今後、CODEはIACCRのメンバーと共に参加メンバーの国や地域で厳しい状況に置かれている人たちを支える活動も展開していきます。

CODEがいち早く新型コロナウイルス感染症支援を始めたことから、講演、シンポ、執筆の依頼が急増しています。引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。

- ・ 左上：市民活動総合情報誌「ウォロ」2020年6・7月号(社会福祉法人大阪ボランティア協会)執筆
- ・ 右上：「国際人権ひろば」No.152/2020年7月号(一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター)執筆
- ・ 下：「コロナ禍の支え合いの現場から—私と地域と世界のファンデ：みんなおなじ空の下オンラインチャリティーイベント」モデレーター(2020年6月28日開催)



コロナ禍における世界各地の自然災害

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが起きてからも、日本だけでなく、世界各地で自然災害が多発しています。どの地域も新型コロナウイルスの感染が拡大する中での災害で、ソーシャルディスタンスや非常事態宣言を解除せざるを得ない状況が起きています。

中国の水害被災地では、感染を防止するために、被災者は家族単位で独立型のテントに避難しています。このように、「With コロナ」の時代において新たな災害支援のあり方が問われています。



中国・四川省の水害被災地
(IACCR事務局の王さんより)

2020年4月以降に発生した主な自然災害

発生日	災害の種類	被害状況
4/3	バヌアツ・サイクロン	(死者31人 被災者約16万人 ※人口の半数)
4/12	アメリカ・竜巻	(死者40人 被害家屋約300棟)
5/15-	中国南部大洪水	(死者・行方不明者158人 被災者約5400万人)
5/17	フィリピン・台風	(避難者約20万人)
5/20	インド・バングラデシュ・サイクロン	(死者インド74人、バングラデシュ16人)
7/4	日本・2020年7月豪雨	(死者82人、行方不明者4人、被害家屋約1万7,500棟)
8/11-	中国・四川省洪水	(死者・行方不明者11人、被災者約10万人)



スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録

- 6/13 CODE 理事会・総会
- 6/16 CODE 未来基金企画「世界のステイホームから」第2回に出席（宮本副代表、吉椿、上野、立部、原田さん）
- 6/20 CODE コロナ支援報告会を開催（宮本副代表、中川理事、村井理事、西海理事、岸本理事、吉椿、上野、立部）
- 6/23 舞子高校でコロナ支援の講義（吉椿）
- 6/24 国際アライアンス「IACCR」会議（以降隔週開催）（吉椿、立部）
- 6/25 神港橋高校インターンシップ開始
- 6/28 関西 NGO 協議会共同フアンド「みんなおんなじ空の下」チャリティーイベントに登壇（吉椿）
- 6/30 NGO-JICA 協議会全体会に出席（吉椿）
- 7/2 高石高校で講演（吉椿）
- 7/4 兵庫県立大学「防災と国際協力」で講義（吉椿）
- 7/12 大阪大学サービスマーケティングワークショップ「コロナと差別」で講演（吉椿）
- 7/16 近畿ろうきん「寄付先団体会議」に出席（吉椿、立部）
- 7/25 関西 NGO 協議会共同フアンド「みんなおんなじ空の下」チャリティーイベントに登壇（吉椿）
- 7/26 レスキューストックヤード、北海道足湯隊へ講演（吉椿）
- 7/29 CODE 未来基金企画「世界のステイホームから」第3回に出席（宮本副代表、上野、立部、原田さん）
- 7/31 2020年7月豪雨「被災地の現場から（日田）」を開催（村井理事、吉椿、立部、上野）
- 8/6 2020年7月豪雨「被災地の現場から（佐賀）」を開催（村井理事、吉椿、立部、上野）
- 8/19 大阪大学「コロナ禍における若者たちの市民活動」でコメンテーター（吉椿）
- 8/20 第1回〇〇と国際協力「映画と国際協力」（宮本副代表）
- 8/28 国際アライアンス「IACCR」ユースミーティングに出席、報告（上野、立部）
- 8/30 2020年7月豪雨「被災地の現場から（熊本）」を開催（村井理事、中川理事、吉椿、立部、上野）
- 9/8 NGO ことはじめ第1回「概要編」（榛木理事）
- 9/10 しあわせの村で講演（吉椿）
- 9/14 CODE 理事会
- 9/17 兵庫・国際協力同士の会（HYOMIC）の勉強会に出席（吉椿、上野、立部）
- 9/24 甲北高校 PTA 会議で講演（吉椿）

今後の予定

- 9/30 NGO ことはじめ第2回「実践編」（村井理事）
- 10/14 震災対策技術展で講演（吉椿）
- 10/22 CODE 寺子屋「気候変動」（気候ネットワーク伊与田昌慶さん）
- 10/24 ヒューライツ大阪「災害と人権」で講演（吉椿）
- 11/9 舞子高校環境防災科「災害と人間」で講義（吉椿）
- 11/22 近畿ろうきん×CODE コラボ企画「コロナと次の市民社会に向けて」（SDGs）を開催
- 12/2 たつの市公民館で講演（吉椿）
- 12/20 ワン・ワールド・フェスティバル for Youth でブース出展
近畿ろうきん×CODE コラボ企画「コロナと次の市民社会に向けて」（若者）を開催
- 12/21 関西国際大学「国際防災協力」で講義（吉椿）
- 12/26 全国中学生・高校生防災会議で講演（吉椿）

スタッフ退職のご挨拶

この度、私、上野は9月末をもちましてCODEを退職することとなりました。8年半の間CODEで活動し、海外被災地支援のみならず若者にとってのNGOでの働き方など多くのことに関わらせていただきました。東日本大震災をきっかけに災害支援に足を踏み入れ、フィリピンやネパールへの支援などを通じて多くの被災者と向き合い、達成できたこともあれば多くの壁に向き合うこともありました。

今後はCODE未来基金を通じて感じた、学生側に立ってNGOと学生をつなぐということに挑戦していき

たいと考えています。CODEで学んだことを活かして、NGOの新たな担い手を生み出していくことができればと思います。

最後に、CODEでの活動において大変多くの方にお世話になりました。本来であれば一人一人に直接ご挨拶したいところですが、昨今の事情もあり、ご挨拶できなかった方も多くいらっしゃいます。この場を借りてお礼申し上げます。今後ともCODE海外災害援助市民センターをどうぞよろしくお願いいたします。（上野智彦）

会員・寄付者ご芳名 (50音順、敬称略) 2020/4/10~9/4

【会費】

安藤尚一、アントニオマルゴット、稲見充典、岩尾興一、岩崎信彦、上田耕蔵、鶴飼卓、宇都幸子、江口節、及川和子、大槻輝美、岡田雅幸、岡本千明、岡本善弘、河崎紀子、河知秀晃、草地とし子、公益財団法人神戸YMCA、小谷美知子、坂戸勝、塩田明子、菅磨志保、砂川光、芹田希和子、高橋貞美、

高水一成、玉岡昇二、旦保立子、中尾正嗣、長澤雄二郎、中島淳、永松伸吾、橋口文博、長谷川眞弓、榛木恵子、北後明彦、水平企、三輪行信、村田昌彦、村山日南子、室崎益輝、目黒和子、目黒服司、茂幾保代、山崎清、山本正紀、山本佳子、山本良治、渡辺知佐子、亘佐和子

【ご寄付】

新井場公德、新雅彦、アントニオマルゴット、稲見充豊、井上雅楽緑、井上由紀子、今村雅子、上野以久、江口節、遠藤聡、及川和子、大槻輝美、大西佑季、岡部徹、岡本善弘、奥山隆生、小野寺歩、片岡幸孝、加藤ちえ、軽込郁、河崎紀子、菊池遼、岸本くるみ、北浦和志、北川英基、木村理恵、小泉桂子、小谷美智子、小林アイ子、小吹岳志、斉藤茂樹、斉藤容子、坂戸勝、塩田明子、浄土真宗本願寺派、所澤新一郎、スガノカズオ、住野和子、高橋朋世、

武田かおり、立部貴文、田辺エツ、谷野順子、玉岡昇二、旦保立子、塚本謙三、中井泰子、長澤雄二郎、中島淳、永松伸吾、西島良明、旗野秀人、林ひさ子、原千栄子、飛田雄一、平林英二、北後明彦、松江直子、三浦真里子、水野明代、水平企、満田里美、村井雅清、村田昌彦、村山日南子、室崎益輝、山崎清、山田千恵子、山本健一、吉川貴子、吉椿雅道、吉野恵子、渡辺知佐子、亘佐和子

— CODE Supporter's Voice —

河崎紀子さんより

初めての海外旅行はインド&ネパール19日間の旅。36年前のエアインディアは、成田から大阪、香港、バンコクに寄港し、インド・カルカッタ到着は真夜中。ホテルへ向かうバスの窓から「白いサナギ」、いや、白布をまとって路上で眠る人々が見えた時のカルチャーショック。数日後、今度はロイヤルネパール機から水平にヒマ

ラヤの山々を眺め、カトマンズへ。そう。かの地との縁は、結構古い。だが、ずっと神戸に居ながら、私はCODEを知らなかった。教えてくれたのはアイルランド在住のサッチャンとコープこうべが企画した吉椿さんのネパールの学習会。なんだ。きっかけはどこにでもあるんだ。気づけばそれが「初」になり「今」に続くことに感謝。

河崎さん、いつもありがとうございます！

イベント情報

CODE 寺子屋

気候変動と災害～コロナ禍の時代に災害に備える～

毎年発生する豪雨と巨大台風、異常な高潮や干ばつ、森林火災など、気候変動の影響と言われる災害は世界中で喫緊の課題となっています。また、温暖化による永久凍土の溶解は、新たな病原菌の放出を招く恐れもあると指摘されています。気候変動に関して国際的に活躍されている講師から、コロナ禍の時代における、気候変動と災害の問題について学びます。

日時：2020年10月22日（木）18:30～20:30

方法：Zoomによるオンライン開催

講師：伊与田昌慶（特定非営利活動法人気候ネットワーク 主任研究員）

参加費：2,000円（学生1,000円）



参加申込みフォーム

<https://forms.gle/7xR287isDEJkFPNf9>

ご寄付のお願い

CODEの活動を継続するために皆さまのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は25%を上限としてCODEの管理運営費に使わせていただいております。ご協力をお願いいたします

入会のお願い

私たちとともにCODEの活動を担っていく会員を募集しています。

【正会員】

CODEの意思決定に参加し、活動に積極的に関わっていただく会員です。総会での議決権を有します。

個人・学生： 年会費 5,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO： 年会費 5,000 円 × 1 口以上
企業・団体： 年会費 30,000 円 × 1 口以上

【賛助会員】

CODEの活動に賛同し、資金面で継続的にサポートしていただく会員です。

個人・学生： 年会費 2,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO： 年会費 2,000 円 × 1 口以上
企業・団体： 年会費 10,000 円 × 1 口以上

ボランティア募集

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などのボランティアを募集しています。詳しくはCODE事務局までお問合せください。

お振込み方法

※通信欄に用途をご明記ください。
(例「新型コロナ」「賛助会員」)

【郵便振替】


加入者名：CODE
口座記号番号：00930-0-330579

【銀行振込】

■ ゆうちょ銀行
支店名：〇九九（ゼロキウキウ）
支店番号：099
口座番号：0330579（当座）
口座名義：CODE

■ 近畿労働金庫
支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040（普通）
口座名義：CODE 海外災害援助市民センター

【クレジットカード】

CODEのホームページより ⇒ 
<http://www.code-jp.org/cooperation/index.html>

講演会・報告会派遣

講演会、報告会を開催してみませんか？あなたの住んでいる地域で開催される講演会にCODEのスタッフを講師として派遣します。お気軽にお問合せください。現在、コープこうべ、近畿労働金庫などでも講演をさせていただきます。

CODEとは？

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で、KOBE（阪神・淡路大震災のすべての被災地を指します）は世界70余りの国々から支援を受けました。その後「困ったときはお互い様」の想いから、世界各地の災害を支援しようと市民による救援活動が活発化してきました。

KOBEの経験と知見を活かし、幅広い智恵や能力をもつ企業、行政、国際機関、研究機関、NGOなどを含めた市民の集まる場として2002年1月17日にNPO法人として発足したのがCODE海外災害援助市民センターです。

CODEは前身となる阪神大震災地元NGO救援連絡会議の時期も含め、これまで63回の救援活動を行ってきました。「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践しています。

CODEは2020年9月現在、アフガニスタン、中国、インドネシア、及び新型コロナウイルス禍での救援プロジェクトを実施しています。インドネシアでの子どものためのスペースづくりやアフガニスタンでのぶどうプロジェクトなど、長い目で見た支援を「最後のひとりまで」という理念を持ってKOBEから世界の被災地へとどけていきます。

また、CODEの活動を未来へつなげるために「CODE未来基金」を立ち上げ、若手NGOスタッフやこれから国際協力や災害支援を志す若者をサポートしています。未来基金を通じて若者がNGOで働くことができる社会を創っていきます。

発行元 (特活) CODE 海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL：078-578-7744 FAX：078-574-0702

E-mail：info@code-jp.org
HP：http://www.code-jp.org/